

フェミニニズムと科学論の界面を議論するための試論

——若干の文献紹介と、簡単な研究プログラムの提起——

塚原 東 吾

本稿は、小川真里子による「Women in Science」とはじめに刺激をうけ、フェミニニズムと科学論の界面を探ることを目的とした、文献研究にモチーフを持つ。その大要はエッセイ・レビューとして、現在「化学史研究」に投稿中であるので、筆者による内容の紹介とコメント、批判はそちらにゆずるとして、ここでは中間発表としての若手ゼミでの議論の成果を中心に、論じて行きたい。

議論の前提として、確認しておきたい点を手短にまとめるとすると、科学論の展開のなかで、科学史からの議論としての、反英雄史観、反天才史観とも言いうる流れがまず確認できる。これは、一般史学における、アナール派的な民衆史への視点にも繋がり、例えば科学史的には、ある天才的な科学者の

みならず、その天才（と呼ばれる）科学者を生み出した知的・社会的環境を総合的に見て行こうという、集団的伝記記述（プロソプグラフィ）を生み出している。また科学哲学においては、いわゆる科学的認識というものの問題化が、（素朴）帰納主義への根本的な疑問を生み、アングロサクソン系に強い傾向であるが、いわゆるパラダイム論などの社会的なアプローチへと展開してゆく一つの方向と、ゲルマン的とも言うべき現象論的な検証の方向をもって、多様に検討されている。「女性」もしくは「ジェンダー」をめぐる言説が、この流れの中のどこに位置づくのか、もしくは、この流れに貢献可能であるのか、それとも批判的に再展開しうるのか、といったところを、基本的な問題意識として、踏ま

えたい。

次に、特殊日本の事情に私たちの知的活動の在りようを顧みるならば、高群逸枝をひきあいにだすまでもなく、すでに戦前より日本には独自の女性学、特に女性史にユニークな業績・視点を導き入れた、輝かしい蓄積がある。このことと、現在私たちが日々を暮らす日常の世界は、科学と技術の所産に、その根源的既定性を負っているということの間に、なんらかの架橋は可能であろうか、という点についても、回答してゆくことができればと願う。

I-1 研究の現状について

まず、日本語で入手可能な当該の欧米の文献では、以下の三冊が挙げられる。

Londa Schiebinger (ロンダ・シービンガー) *The Mind Has No Sex?: Women in the Origins of Modern Science* 邦題「科学史から消された女性たち…アカデミー下の知と創造性」⁽²⁾

Evelyn Fox Keller (エヴリン・フォックス・ケラー) *Reflections on Gender and Science* 「ジェン

ダーと科学：プラトン、ベーコンからマクリントックへ」⁽³⁾

Cynthia Eagle Russett (シンシア・イーグル・ラセット) *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood* 「女性を捏造した男たち…ヴィクトリア時代の性差の科学」⁽⁴⁾

これらに続いて検討したのは、Donna Haraway, *Primate Visions: Gender, Race, and Nature in the World of Modern Science* であり、これは現在完訳が待たれる⁽⁵⁾。これについて、簡単に解説すれば、この大部の著作は、霊長類学を、「サル」を観て物語る「ヒト」の「物語り (story)」としてとりあげ、「霊長類学という科学的知」の在り方を分析している。同書は、「科学」と「社会」との濃厚な相互的連関を、「種」そして「性」をめぐる議論を通じて、「霊長類学」を軸として描き出しており、その意義は大きい。特に、第三部では、「女性（もしくはメス）であることの政治学…霊長類学はフェミニスト理論の一分野である」との標題のもとに、生物学の枠組み、特に霊長類学の枠組みの中で、性差の問題、オスとメスとの生物学的な役割関係がどのように論じられてきたのかを、分析している。なによりも、キ

リスト教的なヒトと動物の境界の問題、そして人種理論にかんがみるなら、霊長類学の起源には植民地支配の問題が通奏低音のように常に響いていることまでは、西欧的な「知」の在り方に関心を抱くものには、ひとまず直感的に感じとることができよう。そこで Haraway は、ひとつひとつの「科学理論」を検討してゆくことを通じて、こうした背景に潜む問題意識がさまざまなかたちで現出する局面を丁寧に描いている。

尚、本書の一部は、既に「現代思想」誌上に訳出されている^⑥。Haraway の紹介者でもあり、気鋭の思想家である、高橋さきのは、日本の思想家としてはめずらしくスケールアップした形での Haraway の議論の深化を行っており、注目したい^⑦。

概説書として、九〇年代初頭のこの分野の画期を画しているのは、*Inventing Women : Science, Technology and Gender* (1992)^⑧ である。これは、英国のオープン・ユニヴァーシティの女性学のコースの四巻本のシリーズの内の一巻であり、日本での同様のシリーズ、例えば岩波の日本のフェミニズムなどと較べると、科学・技術とジェンダーという問題にたいする扱いの差異が、明確である。

I-2 科学史の「中での」女性

——いわゆる英雄史観に対峙して

ここで、本稿で論じられるほとんどの仕事は英語のものであり、そういう言語的な力関係がある状況を、そのまま受け入れるわけではないことを、注記しておきたい。英語が有利である、ということでも無意識に規定されてくる研究の視野の制限には、常に視座の再確認を意識的に行うことが、必要であろう。ここではその方向を、オランダ語での研究に向けてみた。

まず、*Het Geslacht van de Wetenschap: Vrouwen en hoger onderwijs in Nederland 1878-1948* (科学の性：一八七八—一九四八年、オランダにおける女性と高等教育)、は Mineke Bosch による。ドイツ・オランダ系の史書に多い浩翰を誇っている^⑨。

オランダの科学史ではホイヘンスなどを生み出したある種の貴族的な文化の存在も、忘れてはなるまい。ホイヘンスの父であり、オランダの詩人・外交官・政治家としても著名であった、コンスタンタイン・ホイヘンスとも親交があり、当時のサロンの華

として知られている Maria Tesselschade (1594-1649) については、*Maria Tesselschade: Leven met talent en vriendschap* (マリア・テッセルスハーデ：才能と友情の人生) が、Mieke Smits-Veldt によって一九九四年に刊行されている⁽²⁰⁾。著者 Smits-Veldt はこの Maria Tesselschade を一人前の知識人として、交友関係などを、知的な交流にも注視して、丹念に文献的な検証を加えている。「サロンの華」というかたちで、往時の女性たちを受動的な「花」となぞらえるのは、既に歪んだ歴史観であろう。サロン文化の研究に PC(Politically Correct: 政治的な正当性) をきちんと意識して分析を加えてゆくことがすすんでいる、という点がここでは見て取れる⁽²¹⁾。

II 問題提起

筆者は、これら研究の現状を踏まえ、「Women in Science」という概念自体に、二点の検討の余地があることを、本発表で指摘した。二点というのは、Women in Science の「Women」という概念がその(一)、そして「Science」という概念の検討がその(二)である。(尚、再確認となるが、この詳し

い検討は、「化学史研究」投稿中の拙稿で更に進んで、議論している。(二)では、中間報告としての若手ゼミでの討論の内容を、書き留めておきたい。)

II-1 問題提起 (一)

女性学から、ジェンダー研究へ

科学史における女性、というテーマについては、それがある種の「欠落」を「補足」していくだけのものであるという意味を、超えてきてしまっているという状況がきている。研究プログラムの方針設定その(一)として、Women というテーマを「Gender Studies」というかたちで再検討したく思う。

これについて、本発表では、David F. Noble による *A World without Women: The Christian Clerical Culture of Western Science* を、引証・検討した⁽²²⁾。本書は題名が示すとおりに、キリスト教の「男性的」な、そして「禁欲的で、女性を周辺に押しやる(marginalize)のみならず、呪ってさえいる(anathematize)」文化としての側面と、近代科学の成立の関係を論じている。(二)での強調点は、近代

科学に「欠如」している、もしくはそこから「排除」されている「女性」物語なのではない。むしろ力点は、「女性」を「排除」するという「男性のmasculine」物語としての、近代科学のありようにある。Nobleの仕事は、まさに、女性の研究は、それのみでは終わらない、ということを証明しているものである。特別に、「女性」と科学の問題は、「男性」と科学の問題でもある、などという野暮でもないが、「女性」と科学の問題は、「ジェンダー」の問題として、もう少し広い視野を獲得しうる領域である、ということとは、十分に論証できるだろう。

II-2 科学論研究から、科学技術論研究へ

前出のように、筆者はアングロサクソン流の科学論の現在を、いわゆるエジンバラ学派の末裔たち、すなわち Woolger, Pinch, Schaffer, Shapin, Latourらの問題意識の展開の中に、そして、なかでもその一方の雄である Schaffer の蟠踞するケンブリッジに、奇しくも集った Second, Cunninghamらとの切磋琢磨の展開にあると考えている。そこでは、特に科学の「エスノグラフィ」を目指すという方法論と、

ジェンダーへの・ジェンダーからの・もしくはジェンダーを含んだ視点への有効性を検討したい。まずとりあえずは、方法論のみの議論を取って避けて、科学と技術の密接な結びつきを、現実的な状況と切り結ぶトバ口であると考える立場から、この問題を見て行く。そこで、「Science」から「Science and Technology」へ、もしくは「Techno-Science Studies」へ、という視野の拡大が、以下、「ジェンダー」による切断面で、ここではとりあえず二つの方向性を持つと考えられることを論じてゆきたい。

まず第一に、テクノロジーとジェンダーの接点への興味は、生活技術の分析という日常性の分析に導かれてゆく、という方向性が確認できる。この、ある意味で自明であることは、自明であるがゆえ、知性の矛先をゆるやかにかわす。Judy Wajcman, *Feminism confront Technology* (13) のアプローチは、その際、本書はまさに題名の *confront* が、*and* や *on, about* ではなく、この問題を意識的に正面から対応する姿勢に貫かれている。科学技術論のなかでの最近の議論に引きつけて、「欠如しているものは何か？ 技術の社会学のなかでのジェンダーについての視角である」と、この論点の重要性を強調して

いる。具体的な分析として、生産技術、生殖技術、家庭内での技術、そして建築・都市工学などで想定されている「ジェンダー化された空間論」について、論議を展開している。例として論じられる家庭内技術は、掃除機・洗濯機などの家庭における導入とジェンダー的な分業との関係などの説明が、実感的に分かりやすく、テクノロジーとジェンダーを本格的に扱う筆者の旗幟は、この領野を、鮮明に指し示している。

そして第二に、テクノロジーと労働の問題も、ジェンダーから議論され、いままでにない切り口を見せている。中でも、フェミニズムと技術論を結ぶ文脈で、マルクス主義の側からの鋭い切り込みを見せるのは、Harawayへの強い批判を見せたCarol A. Stableである⁽³⁾。Stableは「フェミニズムと科学・技術をめぐる様々な論調をテクノフォビア (Technophobia: 「テクノ」忌避主義) とテクノマニア (Technomania: 「テクノ」偏執主義) というダイコトミーを用い、議論している。この「テクノフォビア」・「テクノマニア」概念は、どこまでを「テクノ」と規定するのか、なにが「フォビア」で何が「マニア」か、などといった定義の問題として、厳

密な議論のためにはやや曖昧さが残る。いわゆるエコフェミニズム派はテクノフォビア派として批判を受けることになる。そのこと自体はたいして新しい視点ではない。しかし、その逆のテクノマニア派について、Stableは、Herbert Marcuseに連なる系譜にJean Baudrillard, Jean-François Lyotard, Ian ChambersそしてHarawayを置き、こちらをテクノマニア派としてかなり激しい表現で(いささか露悪的、とさえ思われるような表現も散見される)批判をしている。この論調はさることながら、従来論じられることの少なかったジェンダーからの視点が、技術論・労働論に新たな局面を与えていることは、注目に資する。

III やや早急ながら、一旦のまとめ

以上、簡単な研究の現状の報告と、この分野での最近の世界の見え方について若干の提起をしてみた。ここでやや早急ながら、この間の研究の獲得点としては、科学史の再編成は、現在の研究状況の認識を踏まえると、従来の女性研究の枠にとどまらずに、(誤解を懼れずに述べれば) 女性のみによらな

い、男性にも参加の可能なかたちで、その意味で開かれた自己言及性の深化を産出してゆくことが期待できると考える。また、科学の在りようへの根本的な疑義を、観念的に流れずに分析してゆくうえで、その日常性と切り結ぶ点を議論する方向性では、「技術」(もしくは「科学技術」)が、「ジェンダー」をも再生産してゆく装置として、私たちの生活了解を根底的に規定している状況を、「ジェンダー」と「科学」技術との関連性への興味は、私たちの哲学するところにさらに深く切り込んでゆけるものと考ええる。本稿がその方向へ、何かを資することができることを想い、筆を跋きたい。

註

- (1) 小川眞里子、「Women in Science」とはじめ』、『化学史研究』第一九巻(第二号(一九九二))、一〇一—一二二ページ。
- (2) Ronda Siebinger, *The Mind has No Sex?: Women in the Origin of Modern Science*, Harvard University Press, 1989.
邦訳は工作舎から。なお邦訳に対する紹介・書

評は大野誠により、『科学史研究』第三三(No. 191)、一九九四年、秋号に掲載されている。

- (3) Evelyn Fox Keller, *Reflections on Gender and Science*, Yale University Press, 1985.

邦訳はやはり工作舎から。なお邦訳に対する書評・紹介は川島慶子により、『化学史研究』第二〇巻、第一号、一九九三年に掲載されている。

- (4) Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood*, Harvard University Press, 1989.

邦訳はこれもやはり工作舎から。これらのみではなく、ジェンダーと科学についての出版では、工作舎の取り組みは先駆的であり、注目を続けたい。

- (5) Haraway, *Primate Visions: Gender, Race, and Nature in the World of Modern Science*, Routledge, 1989.
- (6) ダナ・ハラウェイ(高橋さきの、松原洋子訳)、『多文化フィールドのバイオポリティクス』、『現代思想』、一九九二年一〇月号、一〇八一—四七。
- (7) 高橋さきの、「サイボーグ状況下の身体性：テクノバイオポリティクスという方法論』、『現代

思想」一九九四年、九月号、一二二六—二四〇ページ。

- (8) Gill Kirkup and Laurie Smith Keller eds., *Inventing Women: Science, Technology and Gender, Polity Press*(in association with The Open University), 1992. 他の三冊の各々のタイトルと編者は以下のとおり
- F Helen Crowley and Susan Himmelwelt eds., *Knowing Women: Feminism and Knowledge*; Linda McDowell and Rosemary Pringle eds., *Defining Women: Social Institutions and Gender*; Frances Bonner, Lizbeth Goodman, Richard Allen, Linda James and Catherine King eds., *Imagining Women: Cultural Representations and Gender*.
- (9) Mineke Bosch, *Het Geslacht van de Wetenschap: Vrouwen en hoger onderwijs in Nederland 1878-1948*, Sus Amsterdam, 1994.
- (10) Mieke Smits-Veldt, *Maria Tesselschade: Leven met talent en vriendschap*, Walburg Pers, 1994.
- (11) PCはまた、「政治的(社会的・倫理的)な妥当性」とも訳しうるかもしれないが、日本語にはな
- りにくい概念である。アングロ・サクソン系(特にアメリカで)の議論では、これこれはPCである、とか、これはPCではない、などのように最近では頻出する概念のひとつである。一般には人種的・性的な差別、社会的な不公正を指摘する際によくきかれる。
- (12) David F. Noble, *A World without Women: The Christian Clerical Culture of Western Science*, Oxford University Press, 1992.
- (13) Judy Wajcman, *Feminism confronts Technology*, Penn State Press, 1991.
- (14) Carol A. Stable, *Feminism and the Technological Fix*, Manchester University Press, 1994
- (こかはら とび) 東海大学・文学部)